



TITLE:

# 学習課題遂行場面における動機づけの変化( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

市村, 賢士郎

---

CITATION:

市村, 賢士郎. 学習課題遂行場面における動機づけの変化. 京都大学, 2018, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2018-03-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20847>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

( 続紙 1 )

京都大学	博士（教育学）	氏名	市村賢士郎
論文題目	学習課題遂行場面における動機づけの変化		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、課題遂行場面における動機づけの低下・維持・向上について心理学実験にもとづいて解明し、学習者の内発的・自律的動機づけを支援する方法について検討した教育認知心理学研究である。論文は6章、6つの研究から構成されている。</p> <p>第1章「序論」では、研究の背景として、近年重視されている関心・意欲や自律的に学ぶ力を重視する教育について、心理学においては、内発的・自律的動機づけの観点から議論されていることを述べている。さらに、こうした動機づけは、学年が上がるにつれて低下すること、また、近年普及している情報通信技術(ICT)を活用した学習では、ドロップアウト率が高く、学習者の自律性の支援が課題であることを指摘している。そして、本論文の目的は、知識や技能を定着させるための短期的学習場面に焦点を当てて、動機づけの低下・維持・向上について検討することであると述べている。</p> <p>第2章「学習課題遂行場面に関わる動機づけ研究」では、先行研究のレビューを行い、第1に、動機づけを維持・向上させる要因として、目標設定理論に基づいて、目標設定、困難度、フィードバックの3要因をあげて、学習者の自律の自覚と自己決定性を損なわずに、調整することが課題であると指摘している。第2に、動機づけの低下要因として、外的報酬と遂行の失敗の2つに着目し、それを防ぐ重要性を指摘している。第3に、動機づけの性質と水準に応じた適切な指標と方法の確立の必要性を述べて、最後に、本論文の課題を明確化している。</p> <p>第3章「動機づけを維持・向上させる要因についての検討」では、3つの要因（目標設定、困難度、フィードバック）に着目して、実験的に検討している。研究1では、160名の大学生を参加者として、連続加算課題に取り組む前に、学習者自身に高い目標を設定させる方法として平均成績情報の提示が有効であることを示している。研究2では、120名の大学(院)生に対して、アナグラム課題に取り組む前に、困難度の表示や遂行経験の結果の知識といった、困難度に関わる事前情報によって、課題困難度が低いと学習者に認識させることが、困難な課題への努力を向上させることを示している。研究3では、120名の大学(院)生に対して、2桁かけ算暗算法を学習する課題に取り組む際に、自己ランキング形式の方が、他者との競争型フィードバックよりも学習パフォーマンスと内発的動機づけを向上させることを示している。</p> <p>第4章「動機づけを低下させる要因についての検討」では、外的報酬と遂行の失敗に着目した実験結果を述べ、学習者の内発的・自律的動機づけの低下を防ぐための対策について議論している。研究4では、72名の大学(院)生を参加者として、ストップウォッチ課題において、100円硬貨の画像を閾下に呈示して報酬獲得を予期させることによって、自発的行動を低下させるアンダーマイニング効果が生じることを示した。研究5では、120名の大学(院)生に、可能／不可能アナグラム課題を出題し、不可能課題を出題することが、課題の取り組みの持続性や自己効力を低下させることと、途中で解法教示による介入が、取り組み時間や自己効力感を向上させることを見い</p>			

だしている。

第5章「動機づけの測定方法に関する検討」では、状態レベルの動機づけの強度の動的变化を捉える実験法として、50名の大学(院)生を参加者として、ハンドグリップ課題を用いて、握力値を動機づけの指標として、ベースライン試行と本試行の握力値の変化を、信頼区間の重なりから比較した。その結果、言語報酬群では30秒間全体の握力が持続的に向上する傾向がみられ、金銭報酬群では報酬確定後からの握力が一時的に向上する傾向を示し、考案した実験パラダイムの有効性を示している。

第6章「全体考察」では、本論文の成果をまとめた上で、内発的・自律的動機づけを維持・向上させる課題遂行の循環プロセスモデルを提案している。ここでは、課題の分析、遂行状態の分析、遂行結果の分析という3段階サイクルを示している。さらに、本研究の意義を述べ、今後の課題として、第1に、長期的学習におけるモデルの有効性の解明、第2に、幅広い動機づけ要因の知見や学習の要素を踏まえることによるモデルの理論的精緻化、第3に、非動機づけ状態にある学習者に対して、行動の始発を支援するという観点を取り入れて、モデルを拡張することを挙げている。

付録「清音ひらがな5文字のアナグラムデータベースの作成」では、147個のアナグラム実験材料を作成し、正答率などの材料特性の分析・考察を行っている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、学習課題遂行場面における動機づけの変化を解明するために、5つの実験室実験を用いた研究を行い、動機づけの低下・維持・向上の規定要因を検討し、学習者の内発的・自律的動機づけを支援する方法を論じたものである。

本論文の特色は以下の3点である。

1. 学習課題遂行場面における動機づけの低下・維持・向上に着目して、その規定要因を実験的に解明して、目標設定理論を、自律性や自己決定性の観点から拡張することによって、教育認知心理学の学習動機づけ研究領域に理論的インパクトをもつ点
2. 学習課題遂行場面における動機づけの変化を解明するために、(a) 動機づけの維持・向上要因を測定するための複数の課題を設定し、アナグラム課題データベースを作成した点、(b) 動機づけ低下要因を測定するために、報酬の閾下呈示や不可能アナグラム課題を用いる方法を開発した点、(c) 状態レベルの動機づけ強度の動的变化を捉えるために、ハンドグリップ課題による測定と解析法を開発した点において、方法論上の新しさをもつ点
3. 学習における内発的・自律的動機づけを向上・維持するための支援策について、実証的な基礎研究として多くの示唆をもつ点

第1章では、研究の背景として、現在の教育において、学習者の関心・意欲や自律的に学ぶ力が教育において重視されていることを指摘した上で、心理学における動機づけ研究における内発的・自律的動機づけに着目し、自己決定理論を軸に問題を明確化している。さらに、先行研究から、内発的動機づけの維持が難しい点、ICTを活用した学習におけるドロップアウト率が高い点を指摘し、学習者の自律性の支援が課題となっている点を主張したところに本研究の着眼点の鋭さがある。

第2章では、学習課題遂行場面に関わる動機づけ研究について、レビューを行い、動機づけを維持・向上させる要因と低下させる要因を明確化し、さらに、内発的・自発的動機づけの支援と動機づけの性質（強度、方向性）と水準（特性、領域、状態）に応じた測定法の開発の必要性を述べて、知見と課題を整理して、本論文における実証的検討の枠組みを明確に示している。

第3章では、動機づけを維持・向上させる3つの要因について実験的に検討し、平均情報、困難度事前情報、自己ランキングフィードバックが、学習者の自律の自覚と自己決定性を高める効果の情報であることを解明している。この点は、心理学だけでなく、ICTを活用した教材開発においても意義をもつ。

第4章では、学習者の動機づけを低下させる2つの要因として、外的報酬が潜在的であっても負の効果をもつこと、遂行失敗が諦め行動と自己効力感低下の悪循環を生み出すことをあきらかにし、さらに、対処するための介入法を示している。これらは、学術・実践両面において重要である。

第5章では、ハンドグリップ課題を用いて、状態レベルの動機づけ強度の動的变化を取得・分析する実験パラダイムを考案した。この点は、方法論的な成果である。さらに、言語報酬は試行全体に、金銭報酬は報酬発生時に効果があることを指摘し、動的な変化を解明した点が評価できる。

第6章「全体考察」では、一連の実験による成果に基づく、内発的・自律的動機づけを維持・向上させる課題遂行の循環プロセスモデル（課題、遂行状態、遂行結果の分析）を提案している。これは、動機づけ研究における価値ある理論的貢献である。さらに、このモデルによる課題遂行場面における内発的・自律的動機づけ支援とICT活用学習への示唆は、この研究の応用面における貢献を示すものである。

以上のように本論文は、学習課題遂行場面における動機づけの変化を解明するために、幅広い研究と教育の現状を踏まえた問題意識に基づき、実験手法を工夫したうえで、実験室実験を積み重ねて、考察を深め、統合的モデルを提起することによって、理論面と方法面で多くの新たな成果をあげている。今後に残された問題として以下の点が指摘できる。

- (a) 動機づけの異なる側面の成果を統合する枠組みの必要性
- (b) 各実験課題における動機づけ概念、その性質・水準、面白さ、認知的-身体的課題、課題の内部構造と自律的動機づけの関わりの明確化、言語的・金銭的・社会的な外的報酬と自律的動機づけの関わり方の分析の詳細化
- (c) 金銭報酬の閾下呈示による潜在的効果のより詳細な分析と般化の問題
- (d) 短期的学習場面の成果を、大学生の知的で長期的学習、e-learning における動機づけ低下などの実問題の解決に役立てるための、さらなる議論の必要性

しかし、こうした点は、本論文で見出された多くの新しい知見の価値を損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 30 年 1 月 29 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。さらに、デザイン学大学院連携プログラムの付記部分についての試問も行った。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 平成 年 月 日以降